

JA岩手ふるさとの夏秋ピーマンに

台木「**グランバギー**」が使われています

～高温期の安定生産をレベルアップ～

(編集部)



↑「グランバギー」を全面導入したJA岩手ふるさと。当地のピーマンは、夏は昼夜の温差から、果色、光沢、日もち性にすぐれていると市場から評価されている。営農販売グループ園芸課千田涼太さん(左)、生産者の佐々木久さん(右)。

地域概況

JA岩手ふるさとのピーマン

「JA岩手ふるさと」は1998年にJA水沢、JA前沢町、JA金ケ崎町、JAいさわ、JA衣川村の5JAが合併し発足しました。岩手県のピーマンは全国5位の出荷量を誇り、岩手ふるさとのピーマンは夏秋産地としてトップクラスの出荷量と高品質の産地として全国へ名を馳せています。4月10日定植のハウス作型をメインに5月中旬定植の小トンネル、5月20日ごろ定植の露地栽培まで、5～11月の長期間安定出荷がなされます。

ピーマン栽培に
台木が必要なわけ

当地でのピーマン栽培は胆沢を中心に50年以上続く産地で、JA岩手ふるさと園芸部会ピーマン専門部会は300名弱を数えます。稲作と並行する生産者が多く、管内生産者の佐々木久さんは米とハウスと露地のピーマンのほか、イチゴ、スイートコーン、ピーマン後のホウレンソウなどを栽培されています。ピーマンは価格もよく欠けない品目だそうです。穂木は指定品種

の「京ひかり」。露地は自根でハウスは台木が使われます。台木を使うと苗のコストは2倍となるわけですが、「安心感」があるといいます。「収量が確保できる」ので苗代と天秤にかけた際に「手取りが計算できた方がいい」というわけです。

「グランバギー」の効果

JA岩手ふるさとでは臭化メチルの廃止以降、すでに接ぎ木栽培が導入されています。「グランバギー」台木は3年前から試作され、2023年度の現地比較調査では、ハウス慣行台木栽培1株当たり4.5kgの収量に対し、「グランバギー」に接いだ株は6.7kg、露地では慣行が4.9kgに対し、「グランバギー」は5.8kgの結果とそれぞれ上回りました。これは金額で換算するとハウスで2.2kg増の約710円分、露地で0.9kg増の約290円分となり、苗代の差額を差し引いても手取りで上積みとなりました。そこで2024年度産の接ぎ木苗から全て「グランバギー」での台木供給と決まったのです。

実際、昨春秋に掘り起こした「グランバギー」の根は、地中深くまで伸び、細根も多かったそうです。従来台木は青枯病対策や疫病対策としての意味合いでしたが、千田さんによると「赤果

がでないメリットもある」と新たな利点を感じています。「赤果」とは高温が原因で果実の肥大が止まり、そのまま赤く変色してしまう障害です。佐々木さんは同じハウス内で畝を変えて2つの台木で比較したところ11月には発生で大差がついたそうです。「この台木なら馬力があるので回転が速いし量もとれる」とその実力を実感した佐々木さん。ベテラン生産者も納得の手ごたえだったようです。



↑佐々木さんは自前のハウスのほか、JAの水稲育苗ハウスを利用、5月25日で苗生産が終了次第、少し遅い6月7日の定植。

近年、冷涼な東北であっても夏は温暖化の影響で生育適温を超える日が多く、集中豪雨も多発し、植物体、とりわけ根への負担は大きく「グランバギー」が威力を発揮する。



↑「グランバギー」の接ぎ木



↑他品種 接ぎ木(慣行)